

(第3種郵便物認可)

西 E

# 老後 ひとりぼっち 支えるのは誰か

④

「独居の高齢者は、毎日をどう過ごしているのか。25日、戸畑区の市営住宅に住む2人を担当の民生委員(65)と訪ねた。

## 傾聴

# 寂しさを共感し、そばに

「傾聴ボランティア」という活動がある。特別な資格は必要なく、北九州市では2006年度から、市社会福祉協議会などが養成講座を毎年開催。座学や実習を通してスキルを学ぶ。

傾聴ボランティア団体「ひだまりの樹」は、講座修了生の毛利暁子さん(66)門司区IIを中心に、昨年4月に設立された。乳がんを発症した毛利さんは闘病中の07年に、「社会に恩返しを」と受講。会員73人は講座の修了生だ。

傾聴ボランティアは、東日本大震災の被災地でも実践された。

一日中、テレビに話しかける人や、自宅を訪ねた看護師と数分間しか話す機会がない人…。訪問先の人たちの姿は、人ごとは思えない。だからこそ「自分ならどう接してもらうとうれしいかを考え、行動しています」。会員が福祉施設など20カ所を月に1〜2回ずつ訪ねる。他の施設や個人からの要望も多く、人手が足りないのが実情という。

よりどころを求める高齢者に寄り添い、不安や寂しさに共感する。誰にでもできる小さな活動が、大きな支えとなるのかもしれない。

(大庭麻依子)

「頼れる友だちが近くにおらんよ」。そう話す60代後半の女性は、6年前に引越してきた。近所の高齢夫婦と仲良くなったが、次第に疎遠に。1カ月前に仕事を辞めてからは、丸1日誰とも話さないこともあるという。「1人が気楽に繰り返す一方、「楽しみは息子がたまに来ることくらい」とも話した。

次に会ったのは87歳女性。昨年4月、夫を亡くした。子ども2人は市外で暮らす。ホームヘルパーが週1回来る。買い物は宅配サービス。前向きに暮らそうと大正琴を習い始めたが「夜になると、不安

を終えて帰ろうとしたとき「久しぶりに楽しいお話ができて元気が出たわ」と、こりと笑い、あめ玉を手渡ししてくれた。

帰り道、民生委員が言った。「心の奥はなかなか口に出せないもの。何度も顔を会わせないと、本音は聞けないんです」

高齢者の話し相手になる



訪問先の87歳女性(右)と話す民生委員

### 震災被災地の支援にも

「仙台傾聴の会」のメンバーは約220人で、震災支援では宮城県の仙台市や名取市、岩沼市などで傾聴ボランティアを実施。震災後の約1年間で、避難所や仮設住宅などを700回以上訪問した。現在は仮設住宅の集会所を利用した「傾聴サロン」を月15回以上開いている。森山さんによると、被災地では①同じ境遇に遭った人が多く、近所の人に弱音が言いづらい②高齢被災者を見守る担い手が不足している—といった課題があり、「傾聴を通じた支援の必要性を実感した」と強調した。